

美術部日野春合宿記

松井敦子

2025年5月28日（水）

梅雨入り直前の5月下旬、40年前のリベンジを果たすべく、中央本線日野春駅に降り立った。直ちに駅前の志満屋旅館（画家の宿）のアトリエに向かう。

甲斐駒、鳳凰三山、八ヶ岳などの雄姿を求めてアマ・プロが集う宿である。宿の廊下にはそれらの作品群が所狭しと並んでいる。

宿の周りには小さなコンビニが一軒あるだけで人影もないが、日本の原風景が広がり早苗は風になびき、見ている自分もそこに溶け込みそうな深い深い緑の波が続くところである。

ああ、ここでゆっくりと緑に浸っていたい・・・その時、傍らを歩く瓜坊を見て一遍に夢が覚めた。気を付けないと危ない。そういえば人がおらず、里山の手入れも以前に比べてなされていないようだ。

すでに同行の3名は到着していた。木下氏はイーゼルにキャンバスを立てて、正に制作中であった。雨宮氏と市川氏は「平山郁夫シルクロード美術館（北杜市）」をまわってきた由。私も早速キャンバスを立てる。

以前、合宿で来た時はあいにくの雨で山々は全く見えず、周辺の風景も判らなかった。ただ、広々とした庭の片隅に柿の大木が1本だけ立っているのが印象的な庭だった。



ところが40年の間にすっかり様変わりしており、あの大きな柿の木が判らなくなるほど、庭中が大木で覆われてしまって近景は緑一色のベール状となっている。中景も鬱蒼と木が茂り過ぎているので遠近感を感じにくくなっている。

雨は降らないものの、曇天の雲の中に時折、青空が見えたり、隠れたりと落ち着かない。

野見山暁治先生の「ものは動いているので形の内外はせめぎ合っており今という生命を引き出せるか」の言葉を思い出す。

山の稜線は何とか見えているのでアトリエで1枚仕上げようと書き始める。どうも平坦な構図が気になってしまうが後の課題としよう。明日も雨は来ないようなので頑張ろう。

夕食は以前と同じように山海の珍味よろしく沢山のお皿が並んでいてびっくりする。静かなので他にお客さんがおられないのかと思っていたら、食堂に入ると15名ほどの年配の女性客がいらした。温泉でもないのにどこにお出かけになるのでしょうか。4人の芸術家？は芸術談義が盛り上がり楽しく有意義な時間は過ぎていった。明日は雨にならないうちに頑張ろうと早めに休む。

2025年5月29日（木）

市川氏は所要のため早めに出立。3名は早速アトリエで昨日の続きを始める。シーンと静かな時間が流れる。皆、集中している。

雨宮氏は水彩、木下氏は油。

私は集中できず、この平坦な景色を何とかしたいと、もがく。

今回もデュオ（水性油絵具）を使用したがる色が重ねても下の色に吸われてしまう。何回試しても同じ結果になるので、あとは帰宅後、油彩での上書きで試してみたい気持ちと構図の不満が重なりだんだんと意欲も失せてくる。

午後になっても天気はなんとか持っている。もう少しまとめたいが、もがくばかり。とうとう山々も見え隠れするようになってきて、皆も限界に近づいたので片付けを始めた。

さて、次回は伊豆あたりに出かけましょうか。



まとめ

今回も中途半端な絵を持ち帰ることになって、天候のせい、絵にならない景色、などと不満を一緒に持ち帰ろうとしていた。しかし、帰りのあずさ車中で、私が絵を描く理由が上手下手に関係なく描画行動にある独特の魅力を感じていることだと思った。

野見山暁治先生によれば「優れたアーティストはものを視る。凡庸なアーティストはものを眺める。ものを視るとは現象の内側に入ってゆく洞察の眼。出会いの息づかいが如実に伝わる」と。

そして自分自身をいかに表現するかということのようだ。

芸術活動の目的は自分を表現することであって創造性を駆使することは脳の活性化にもつながり、仕事面にも良い影響をもたらすといわれている。

エリートが美意識を鍛えるのは創造性を伸ばすことが問題発見力を高めることを知っているからである。

認知症予防にも大いに役立っているのです、芸術活動で健康寿命を延ばしましょう。

以上